



TITLE:

観測帳

AUTHOR(S):

中村, 要

---

CITATION:

中村, 要. 観測帳. 天界 1931, 12(129): 28-29

ISSUE DATE:

1931-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161745>

RIGHT:



## 観 測 帳



### 花山天文臺 中 村 要

**新小遊星の命名** ベルリン中央計算局から今年度の新小遊星の正式登録番號が發表された。登録されたのは1153—1183の31箇である。

**小遊星 Gunlöd 657番** Gunlöd が昨年南阿ユニオン天文臺で再発見された事は天界の數號前に報告されたが、1931年には改正推算によつて9月7日ハイデルベルグ、9月15日にユツクル天文臺で推算位置の近くに觀測され確證された。

**小遊星1089(1927 WB)**此の小遊星は東京天文臺の及川氏発見のものであり、昨年9月17日ユニオン天文臺で再觀測されたが、ヤーキース天文臺の Van Biesbroeck 氏は同9月18日に觀測、其の際運動の方向を誤つたものか別のものとして1930 STなる假名稱が附されて居たが、其の後の軌道計算で1089號なる事が明かにされた。

**193/C Ryves 彗星**8月20日過ぎから當分見えなかつたこの彗星は9月20日過ぎ大分熱心に薄明の東天を指したが見つからなかつた。それから永らく曇天が續いて10月15日朝始めて見え、容易にファインダーで見つかつたので東天を昇つてから約一時間も觀測出来たので都合がよければ10月5日頃には觀測出来たはずである。ヤーキース天文臺の Van Biesbroeck 氏は10月9日に最初の觀測をしたのであるが案外おそかつた様に思はれる。再觀測當時の光度は8.5—9等で甚だぼんやりした彗星であつた。自分はF3鏡で面白い尾の觀測をした。當分位置は餘り動かないし今後長く觀測出来るだ

らう。

**ストックホルム天文臺の大望遠鏡** スエデン國ストックホルム天文臺移轉に伴つて多數の新器械を購入したが、其の一つにグラップ會社に61センチの寫眞望遠鏡と51センチの視望遠鏡との双望遠鏡を注文し最近に完成した。レンズ材はパーソン光學硝子會社の製品である。器械部は總て最新の設計のものである。構造は東京天文臺の65センチ寫眞望遠鏡と似て居るが筒のマウンティングの方法に、著しい差が見出される。總重量は約12トンで東京天文臺のそれより大分重い東京天文臺のはマウンティングが弱いが、其の缺點が構造並びに重量の點でよく補はれて居る様に思はれる。

**トリノ天文臺の小遊星觀測** 伊國トリノ天文臺 Pino Torinese は1925年頃から小遊星の觀測を始めた。器械はツアイス製の20センチ寫眞儀で焦點距離は100センチ13センチの案内望遠鏡がついて居る。視野は9°に12°かと思はれる。レンズは多分ペツブル型らしい。觀測者は Volta 氏を主とし今年から Lacchini 氏が加つて居る。普通程度の熱心さであるが新小遊星は三個許り見つけて居る。

**御斷り**、編輯者の都合で十二月號に出る筈の此の頁が一號おくれました。編輯者の方でも今後は毎號出して下さる筈であり、筆者も段々面白い材料を提供したいと思ひます。

# 観 測 帳

花山天文臺 中 村 要

**多数の新小遊星発見さる** 去る1931年10月に赤経一時附近で驚くべき多数の新小遊星が発見された。小遊星の假符號は十月上旬なれば TA—TZ, TZ の次は TA<sub>1</sub> から始まるのだが TZ<sub>1</sub> を突破し TH<sub>2</sub> まで達した。Uccle, Simeis, Hidclberg 天文臺等で発見されたもので大部分は Hidclberg で Reinmuth によつて発見され殆んど十四等級のものである。毎年このあたりで発見されるものは多いが、毎年秋の頃は一般に天氣がよいのではないかと思はれる。

**新小遊星の眼視発見** 新小遊星の眼視発見は近年は甚だ稀で1114番 Lorraine は1927年にニースの Shauvasse の眼視的に発見した最近のものであるが10月13日に Hidclberg の Mündler は二個の新小遊星 1931 TD TE の二個を発見した。氏は時には十四等もの微光小遊星の眼視観測に従事して居る唯一の経験家である。

**1931年UJ** 10月18日 赤経1時39分 赤緯北28度56分の點で日々運動

—2.4分, +21'

といふ珍しい急運動を有する由14.2等の小遊星が Reinmuth によつて発見された。地球に甚だ接近した小遊星と思はれる。

( $\mu = 1300$ 秒)

**796 Sarita** 去る9月自分が検出した此の星は Algier, Simeis でも観測され確められた。

**1931長田彗星** 11月19日夕に西の空で見たのが最後らしい。10月から光度に變動あるらしいのが自分で氣がついて居たが、果して此れは確かであつて Van Biesbroeck 氏も認めて居る。推算では 9.5等近くである

のに一度8等まで登つて ファインダー でも容易に見えた事がある。間もなく東天に移るが其の時は大分淡くなる筈。

**1931C Ryves 彗星** 10月20日前後に撮影した寫眞數葉から珍らしくも太陽の方を向いた長さ一度許りの尾があるのを知つて居たが、此れも Van Biesbroeck 氏が観測した。11月には太陽の方を向いた尾がなくなり尾の形が全く變つた。光度も殆んど十一等になり、甚だ莫然たる彗星になつた。

**1931d Neujmin 彗星** Neujmin 彗星は Wilson 山及び Yerkes 天文臺に於て観測されて居るが10月中の光度は約十七等であつて像は全く恒星と同じであつた近來横紙破りの妙な形をした彗星がどしどし観測されるのは面白い。

**獅子座流星群** 去る11月中旬の獅子座流星群は思つた程現れず例年のペルセウス群にも及ばない様に思はれた。流星撮影も試みたが獅子群の様な速いものは輻射點に直接カメラを向けて飛行の緩いものを捕へねば見込がない事が知れた。明年は十一月十日過ぎから早期観測を試み早期流星の明るさを見たなれば極大時の様子が早く推定出来るだらう。

**ワシントン天文臺の小遊星観測** 米海軍天文臺は天文臺の本來の目的から位置天文學に熱心であるが1902年から66センチ屈折鏡に一對の15センチダグメヤー玉を取つて小遊星の検出に利用した。1912年に同臺員故ビーター氏が自ら口径25センチ焦點287センチの一對のトリプレット玉を製作し別の赤道儀に取つて寫眞觀測を行つた。原板は8×10時のもので4°×5°の寫野を有し、小遊星はマイクロメーターの逆運動で點像を撮影し位置の計算は二箇の比較量によるものを數組繰返すか、或は數箇の比較星によつて居る。1922年頃一時中止されたが1930年に再開された。